



にちげつりゅうもんまき え ほとけどう ぐ そく
日月 龍 文時絵 仏 胴具足

安土桃山時代 大阪城天守閣蔵
伝後藤基次所用

大坂の陣で真田幸村とともに豊臣方の主力の一角を担った後藤基次（又兵衛）の遺品と伝えられています。胴には龍と日月が金銀の時絵で描かれ、兜は獣毛を植えた「総髮形」と呼ばれるもので、正面を飾る前立は獅子の顔を模しています。後藤基次（又兵衛）は播磨（現在の兵庫県）の生まれで黒田如水・長政に仕えましたが、関ヶ原の合戦後に長政と対立し、大坂の陣では豊臣方として活躍した豪傑として知られます。

戦国時代には、簡便で実用性を重視した新しい形式の甲冑である「当世具足」が登場します。技術の革新や集団戦の激化により、武将の存在感を示す自由闊達なデザインを取り入れたものが作られるようになりました。

（特別展「天下統一―信長・秀吉・家康と岐阜―」にて展示）

特別展

天下統一 —信長・秀吉・家康と岐阜—

2023.10.7(土)～11.19(日)

「美濃を制する者は天下を制す」と形容されるように、京都と近接し、豊かな平野が広がる美濃は、「天下」への要衝であり、織田信長や豊臣秀吉、徳川家康の「天下人」も岐阜をめぐって争いを繰り広げました。

そうした戦いは、一国内の家督争いから、複数国による争いへと拡大し、やがては、関ヶ原の戦い（慶長5年〈1600〉）、大坂の陣（慶長19～元和元年〈1614～1615〉）のように全国を二分するまでに規模を拡大していきます。また、戦いの大規模化は、甲冑などの武具にも変革をもたらしました。

本展では、美濃を舞台とした戦いを中心に、信長、秀吉、家康による「天下統一」への道程をたどります。それらと合わせて、戦国の華ともいえる甲冑の機能と意匠の変容を紹介します。

プロローグ 一戦国の争乱のはじまり—

応仁・文明の乱は全国を争乱に巻き込み、戦国時代が幕を開けます。ここでは美濃国の実権が守護土岐氏から守護代斎藤氏とその家臣へ、そ



1 市指定 斎藤妙椿像（部分）

狩野常輝筆

元文2年（1737）祖清賛 開善院蔵

前期 10月7日（土）～10月29日（日）で展示

して斎藤道三へと移り変わる様子をたどります。

1の斎藤^{みょうちん}妙椿は甥の守護代・斎藤^{としふじ}利藤に代わって美濃の実権を握るようになり、応仁・文明の乱の勝敗は妙椿次第といわれるまでになります。



2 重要文化財 斎藤道三像（部分）

室町時代 常在寺蔵

後期 10月31日（火）～11月19日（日）で展示

2の斎藤道三は父が美濃へ移住し、斎藤氏の家臣となって力をつけました。それを継いだ道三はやがて守護・土岐氏を追放し、美濃の「国盗り」を成し遂げました。

I 織田信長の時代

斎藤^{たつおき}龍興を倒して稲葉山城に入った織田信長が本能寺の変で没するまでの15年間、岐阜が戦場となることはなく、道三が形成した城下町は信長の時代に大きく発展したのです。



3 重要文化財 織田信長制札 楽市場宛

永禄10年（1567）10月 円徳寺蔵

3は永禄10年（1567）に信長が「楽市場」宛に出した掟書です。通行の自由や租税の免除、無理な売買の禁止などを定めており、戦乱で荒廃した市場の復興のために出されたものと考えられます。

II 豊臣秀吉の時代

本能寺の変で信長・信忠が没したのち、織田家の家督は秀吉の推す三法師に決まりますが、その後も信長の後継者を巡る争いが続きます。この章では、信長の後継者を決定し、天下を巡る争いとなった二つの戦いを中心に、秀吉時代の岐阜を展観します。



4 賤ヶ岳合戦図屏風（部分）
江戸時代 岐阜市歴史博物館蔵

4は柴田勝家と秀吉の戦いを描いた賤ヶ岳合戦図屏風です。七本槍の活躍を描いた場面です。



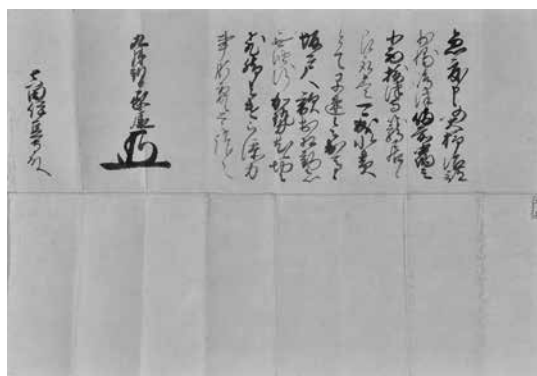
5 縹糸下散紅威胴丸
安土桃山時代 大阪城天守閣蔵

5は賤ヶ岳七本槍の一人として知られる脇坂安治が秀吉から拝領した胴丸です。胸板や裾板

には豪華な金蒔絵が施されています。

III 徳川家康の時代

秀吉の死後、政権内の主導権争いから、徳川家康と石田三成の陣営の対立が激化します。この章では岐阜城の戦いから関ヶ原の戦い、大坂夏の陣による豊臣氏の滅亡までをたどります。



6 長野県指定 徳川家康書状 真田信幸宛
（慶長5年〈1600〉）9月1日 真田宝物館蔵

6は岐阜城の戦いの後、江戸城の徳川家康から徳川秀忠軍の真田信幸へ、大垣城へ立てこもる石田三成らを水攻めにするため、兵を出したことを伝える書簡です。

○当世具足

戦国時代に入り歩兵集団戦が激化すると、機敏に活動できるよう甲冑に改良が加えられ、実用性を重視した「当世具足」が登場します。個性的なデザインの具足も作られるようになりました。7は、脇坂安治の兜です。冠の装飾を模した金地唐草透の後立が目を引きま

す。
作者銘の「春田光定」は桃山期の奈良の名工です。



7 鉄鑄地置手拭形兜
銘 春田光定作
安土桃山時代 個人蔵

加藤栄三・東一 日展出品作と下絵

2023.10.3(火)~2024.1.28(日)

私たちが、美術館や画廊で鑑賞する作品は、そのほとんどが本画（完成作品）ですが、一つの作品が完成する裏には、多くの素描・下絵が描かれてきました。平成3年（1991）5月の開館以来、栄三・東一両画伯のご遺族はじめ、多くの方々から作品のご寄附をいただけてきました。寄附作品の中には本画を仕上げるまでに描いた貴重な素描（スケッチ）や下絵が多く存在し、両画伯の作品を仕上げるまでの制作過程を鑑賞できる展覧会の開催が可能になりました。

日本画家が制作の過程で素描（スケッチ）や下絵を描く背景には、扱いにくい画材を現地で広げて制作することが困難なことがあります。そのため、取材地で描いた素描（スケッチ）をもとにアトリエで構想を重ね、下絵を作り、下絵をもとに本画（完成作品）を描いていくという制作過程をたどります。

一つの作品が完成する背景には、日本画家が現地で描いた多くの素描、何度も構想を重ねた下絵といった“作品以前の作品”が隠されており、名作を生み出すための題材との格闘の跡が隠されています。

心惹かれた題材に出逢った時、その感動をい



加藤栄三「BANTING (牛)」大下絵

かに表現するか、自らが得意とする技法と使い慣れた画材を駆使して、新たな表現方法を模索しながら何度も下絵を制作します。その過程の中で日本画家は新しい思考と技法を習得していきます。

昭和35年（1960）、加藤栄三は審査員を務めた第三回新日展に、ジャワ野牛と呼ばれる牛を題材にした作品を発表しました。気が荒く家畜にはならないといわれる野牛ですが、その端麗な風貌に魅せられた栄三は何枚ものスケッチを描きました。当館には栄三が現地で描いたジャワ野牛のスケッチ数枚と、本画を描くために描いた2枚の大下絵が残っています。異なった画材で描かれた2枚の大下絵は、栄三がこの題材を仕上げるために画面と格闘した跡がわかる貴重な資料です。今回、本画とあわせてご紹介します。



加藤東一「女人」（スケッチ）

東一は日本芸術院賞を受賞した代表作「女人」を描くために100点前後のスケッチを描きました。今回、全てを公開することはできませんが、その一部を展示し、東一がこの作品にかけた気概が伝わる展示にしたいと考えました。こちらは本画、下絵、素描を同時公開します。

絵画の制作過程を系統的に展示し、作者がいかにモチーフと対峙し、試行錯誤を繰り返しながら作品を完成させていったか、その息づかいや眼差しを感じ取っていただけるよう心がけました。完成作品では見られない作家の心の動きを感じ取っていただけたら幸いです。

はっ・とび 2

2023.10.3(火)~12.3(日)

日本芸術院会員、日本美術院同人・評議員、
伊藤^{ほうじ}髭耳先生の日本画研究グループ「はっ・とび 2」の研究発表展を開催します。

「はっ・とび」とは“はっ”という意気込みを表した掛け声で、今の自分から一段上に飛びたいという気持ちを表したものです。効率よく写真をもとに絵を描き起こすのではなく、自分の目と手を使い写生を繰り返すことで見えてくるものを絵にしてきました。

本展では、題材から教えてもらうという姿勢を忘れず、題材を大切にしながら制作を続ける伊藤髭耳先生とメンバー11名の新作を紹介します。

「はっ・とび」から「はっ・とび 2」へ

「はっ・とび」は毎年、地方の小さな美術館、画廊を中心に作品を発表してきました。展覧会の回数を重ねるたびに数々の課題に直面してきました。取材に時間をかけ、写生を繰り返し行うこと。一度仕上げた作品でも取材をつづけ、もう一度描いてみるという勉強方法は一部のメンバーには理解されなかったようで、18年間続いた活動に一旦終止符を打ちました。

令和になり、これまでの題材から学ぶ勉強方法に加え、大下図を大切にする勉強会をスタートさせました。「日本画を描き続ける覚悟をもっとつける」「写生をもっとしっかり描く習慣をつける」「大下図を描くことで画面を整理する」「細い筆の線の力を認識してゆく」、これまで蔑ろにしていた写生から大下図を作り、本画を描くという日本画ならではの制作プロセスをもう

一度見直すことから、「はっ・とび 2」がスタートしました。



伊藤髭耳「十二神将（卯）」

「大下図を大切にする会を発足」

～伊藤髭耳の手記より～

大下図で画面を整理する習慣を身につけて来ました。欧米との絵画表現の違いを感じています。描きながら絵を作っていくのと違い、大下図の段階でしっかり絵を整理し、細い線のゆらぎで構成しています。この線の存在が本紙に移す時、大事になり、紙の地を残す表現をしていくと変更ができないことから慎重に進めていかななくてはなりません。この線は絵の力になっていると思います。これは最乗寺の屏風を描きながら気付き、学んだような気がします。

だんだん絆が生まれ深まり、強く生きる力が湧いてくるようです。そこには上辺のものではない力が作用しているはずです。

絵の役目と力がちゃんとあるはずです。

辿り着けるか分かりませんが、生きている限り絵を描き続けたいと思います。日本の文化の根底にあるコツコツと諦めないで、身体で体験し築き上げていきたいと思っています。

研究ノート

岐阜市南部地域の古墳について

井川 祥子

1 岐阜市南部の状況

岐阜市内には、約350基以上の古墳が確認されており、北部地域の山地に約80の群集墳が集中している。南部地域については、現状墳丘や石室などが残存し、明瞭に古墳と確認できるものはない。過去に銅鏡などが出土したことで知られる柳津町上佐波に所在する大了寺古墳のみである。

岐阜市南部地域については、発掘調査がなされておらず、遺跡の性格などの全容は不明であるが、河川改修や土地改良工事、住宅建設に伴う試掘調査では、縄文時代、弥生時代前半の遺物が出土しないことから、弥生時代後半以降に開発が進んだと考えられる。

2 古墳及び古墳に関連する遺物出土遺跡

ここでは、以前から認識されている古墳の他、採集遺物の再検討、最近の調査によって古墳及び古墳の可能性のある遺跡について取り上げる。

○大了寺古墳

柳津町上佐波西4丁目に所在する。『岐阜市史』資料編考古・文化財では「佐波古墳」として紹介されている。大正15年（1926）、川跡の埋め立てのため、小高い畑を掘削中に、銅鏡4面（神獸鏡等）、勾玉4、管玉21、小玉数個、車輪石2、石製紡錘車2、直刀、鉄斧が出土したとのことである。地籍図の検討から全長約90mの前方後円墳と推定できる。現在は畑地となっており、周辺が水田であることを考慮すると、古墳は微高地上に築造されたと考えられる。

○東鶉B遺跡（図1）

開発に伴う試掘調査で、円筒埴輪の破片が複数出土した。表面にはタガ状の凸帯がありタテハケ、ヨコハケが施され、円形の透かし穴がある。表面の一部には赤彩も確認できる。埴輪の他に外面にミガキがある口縁部が広がる壺も出土しており、古墳に関連する遺物の可能性がある。埴輪の出土は鶉地域に古墳があった可能性を示す。岐阜市内では表面採取された埴輪は複数あるが、発掘調査によって出土した埴輪は少なく、船来山古墳群と日野地区のみであり、非常に貴重な資料といえる。

○蟹田塚遺跡（図1）

蟹田塚遺跡から出土した遺物群については、松田亮氏が報告をしている。もとは小高い土塁状のものがあり、昭和30年頃に近隣の住民によって調査がされ、土師器などの遺物が出土した。遺物は屈折脚高杯（2）、器台（1）、長頸壺の体部（5）、外面にミガキがある短頸壺（4）、小形丸底壺（6）、小型平底甕（3）、甕の底部（7）、白玉（8）という構成で、複数の完形品があることなどを考慮すると土塁状の高まりは古墳であった可能性がある。

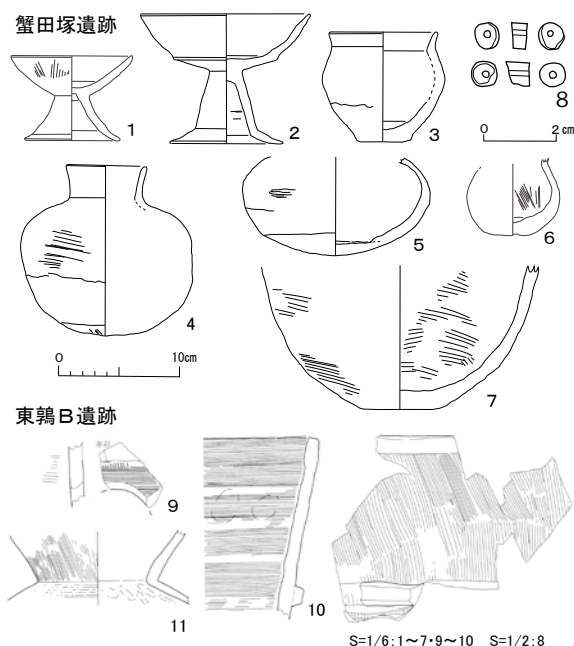


図1 蟹田塚遺跡・東鶉B遺跡出土遺物実測図

令和4年度 新収蔵作品

山本丘人 作「瀑」

号数 38.8 cm×52.2 cm

制作年 不詳

形態 額装

【作品解説】

「もっと自由に好きな絵を描きたい。今はとても自由に絵を描くことができない。生活があるからね。」山本丘人はその呪縛から己を解き放つために苦しんでいました。現実と虚構が入り混じる中で生み出された昭和30年代の作品と推測できます。

日展の閉鎖的な権威主義への批判から生まれた創造美術を加藤栄三とともに立ち上げ、日本画壇に新風を巻き起こした丘人は、日本画の将来に向けて、作家として、求道者としてその精神を具現化していくという課題に取り組み続けました。

晩年の丘人の作風は、剛健で力強い雄渾な画面から大和絵のような抒情的で高雅な画面に戻っていきます。

昭和19年（1944）、東京芸術大学助教授、昭和22年（1947）、女子美術大学教授、昭和52年（1977）、文化勲章受章、文化功労者顕彰。



利用の御案内

■ **開館時間** 午前9時～午後5時
(歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館の入館は午後4時30分まで)

※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

■ **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始（12月28日～1月3日）
(月曜日が祝日の場合はその翌日)

※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、ご注意ください。

■ **観覧料** ◎歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館
(団体は20人以上)

高校生以上…310円 (団体250円)

小中学生……150円 (団体90円)

両館共通で観覧される場合

高校生以上…520円 (団体410円)

小中学生……260円 (団体150円)

※特別展は、その都度料金を定めます。

◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。(ミライロID可)

①岐阜市在住の70歳以上の方（特別展を除く）

②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、難病に関する医療受給者証の交付を受けて

いる方、及びその介護者1人

③家庭の日（毎月第3日曜日）に入館する中学生以下の方

④③に同伴する家族（高校生以上）の方（特別展を除く）

⑤岐阜市内の小中学生

◎原三溪記念室は、無料でご観覧いただけます。

交通案内

《歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館》

JR 岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きの乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、徒歩約5分。
岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

お車でおこしの際は、岐阜公園駐車場をご利用ください。
詳しくは岐阜市歴史博物館ホームページをご覧ください。

<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp/>



《原三溪記念室》

岐阜バス茜部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行きに乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分。

岐阜バス茜部三田洞線 もえぎの里及び高桑行きに乗り、「もえぎの里」で下車、徒歩すぐ。

博物館だより No.115 2023.10

編集・発行 岐阜市歴史博物館

(分館) 加藤栄三・東一記念美術館

(分室) 原三溪記念室

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階

☎058(265)0010

☎058(264)6410

☎058(270)1080